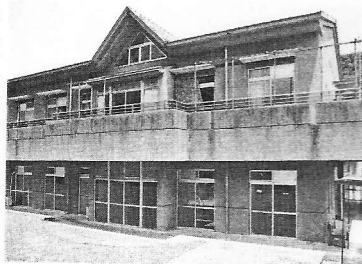


# 「障害者と共に」住民模索

## 支え合ってきた地域で「考える会」



「津久井やまゆり園」前の献花台で手を合わせる人＝25日、神奈川県相模原市



南向きに居室が並ぶ津久井やまゆり園。事件当日、植松聖被告は1階の部屋の窓ガラスを破って侵入したとされます＝20日

# 相模原殺傷事件1年

## 「生きた証」記録に

### 元職員が遺族ら訪ね取材

津久井やまゆり園の元職員、西角純志さん(52)。19人の犠牲者のうち7人の支援に関わりました。事件後、遺族や元職員などを訪ね、犠牲者の人柄が分かるエピソードを記録しています。事件の犠牲者は匿名

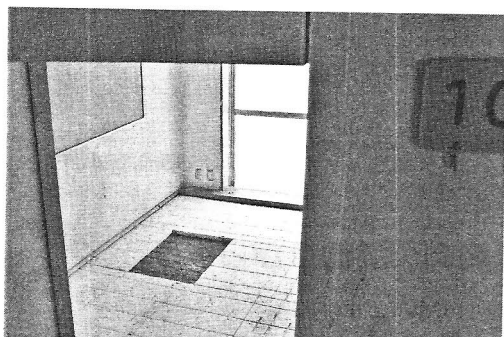
生産性などの能力ではある風潮にも目を向けています。「経済的合理性ばかりを追い求める新自由主義的な風潮が、障害者をますます排除する方向に進んでいる。排除ではなく社会的包摂(ほうせつ)「包み込むこと」によって、共生社会を実現しなければならぬ」

本田祐典記者

## 亡くなった方々のエピソード

(西角さんの記録から)

- 67歳 男性** ホームのリーダー的存在。新人の職員に丁寧に仕事を教えていた。
- 49歳 男性** 囲碁や将棋が好き。「ドアが開まります。ご注意ください」と車掌さんのマネをしていた。
- 43歳 男性** 興奮すると廊下でびよんびよん跳びはねていた。
- 55歳 男性** 絵や写真を指さして自己表現する。家族の訪問時は不自由な足で一目散に玄関へ走った。
- 65歳 男性** 出勤してくる職員を小走りに玄関まで出迎えていた。
- 66歳 男性** 趣味はラジオをいじること。音や声に興味津々だった。
- 66歳 男性** メンソールのクリームが好きで、手や鼻につけると喜んだ。普段は居室で演歌を聞いていた。



公開された津久井やまゆり園1階の居室。事件の痕跡は清掃され、畳やその下の断熱材まではがされた部屋もありました＝20日

神奈川県相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者19人が殺害された事件から26日で1年です。事件で、園と支え合ってきた地域社会も深い傷を受けました。こうした中で「共に生きる社会」の在り方を模索する動きも始まっています。 安川聖記者

同園正門わきに置かれた献花台。25日、小学生の娘を連れて女性が花を手向け、手を合わせた。初めに訪れたという女性は「事件が気にかかっていた。入所者がどんな思いでいたのか知っていた。入所者がどんな思いでいたのか知っていた。入所者がどんな思いでいたのか知っていた。」

今この地域に住む元女性職員は、「一人ひとりの入所者、何十年も付き合ってきた。あの人はよく歌を歌った、と思い出す。事件から1年。苦しさは当然あります。」

事件の後、同地区や近隣の住民が「共に生きる社会を考える会」を立ち上げました。呼びかけ人が共同代表の宮崎昭子さん(80)は、「どうして事件が起きたのか。障害者を隔離するのは「仕方がない」と思うような「優生思想」が、私たちの心にもあったのではないかと、地域住民同士、それを一緒に考えたかった」と言います。

「やまゆり園と関わった53年は、地域にとって大きな財産。園の建て替え計画は未定だが、入所者がまたこの地域を選んで戻ってくるれば、私達は心から歓迎する」

## 「園との53年は大きな財産」

「共生社会」というけど、ここで昔からやってきたことなのよ」と元職員の女性は言います。 時「涙をためず」と目に入所者からはたきさんの「宝物」をもらった、と女性は言います。こだわりの強くない食事をしない入所者が参加して、地域の祭りのみこしも園内を練り歩きました。

「差別はいけないなんて当然のこと」と考えていたはずの自分が、姉のことは「恥ずかしい」と感じていた。突き詰めれば「障害者不幸」という植松聖被告の論理と通じています。この事件で初めて、自分の問題として考え始めた」

姉に身体障害がありました。 「差別はいけないなんて当然のこと」と考えていたはずの自分が、姉のことは「恥ずかしい」と感じていた。突き詰めれば「障害者不幸」という植松聖被告の論理と通じています。この事件で初めて、自分の問題として考え始めた」